

# 否定の補助詞の文法化について

## La grammaticalisation de 《pas》 comme auxiliaire de négation

浅野幸生  
Yukio ASANO

### はじめに

フランス語における最も標準的な否定文は、動詞を一場合によっては動詞の一部を *ne, pas* という二つの言葉で挟むことによって作られる。動詞に後置される *pas* の方は *point, jamais, guère ...* などに置き換えることにより、様々なニュアンスを持った否定文を作ることができる。ここではこれらの語を一括して否定の補助詞(Auxiliaires de négation)と呼ぶことにする。<sup>(1)</sup>

否定文の形成に常に二つの要素が関与してきたという事実こそが、フランス語の否定表現を豊かにすると同時にその歴史を煩雑なものにしていることは論を待たない。この小論では、否定の補助詞が中世においてどのように出現し補助詞としての地位を獲得していったかについて考察してみたい。

### I. 否定の循環

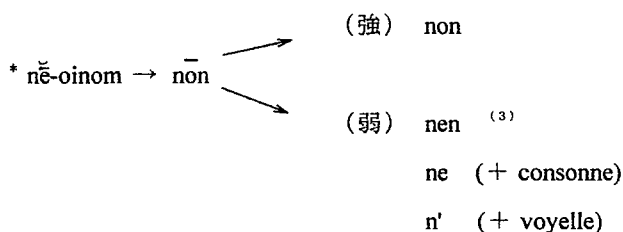
O. Jespersen によるとフランス語と英語の否定表現は以下のような変遷をたどったと言う。<sup>(2)</sup>

1. 古代ラテン語	<i>ne dīcō</i> (= not say-I)	1. 古期英語	<i>ic ne secge</i>
2. 古典ラテン語	<i>non dīcō</i> (= not say-I)	2. 中期英語	<i>I ne seye not</i>
3. 古フランス語	<i>jeo ne dī</i> (= I not say)	3. 初期近代英語	<i>I say not</i>
4. 中フランス語	<i>je ne dis pas</i> (= I don't say)	4. 近代英語	<i>I do not say</i>
5. 現代口語	<i>je dis pas</i> (= I say not)	5. 現代口語	<i>I don't say</i>

この図式によればこれら二言語の間には、初期において強調形が出現する（英 *not*、仏

はその前身であるラテン語において non)、時代を下って補助要素が併用される(仏 pas、英 do)、最も新しい段階—彼はそれを現代語の特に口語体と捕らえていたようだ—においては、本来の否定辞より補助要素の方が(少なくとも音声的観点では)否定の中心になるなどの共通点を見いだすことができる。

本来の否定辞である ne は、中世においては単独で十分に否定の機能を持っていた。G. Price によると、『ロランの歌』では ne に pas が添えられている例は4つしか無いと言う。その後動詞の接頭辞的存在になるにつれて、短い形の頻度が増し、次第に表現力を弱めて行ったのだろう。



このように存在感の希薄になった要素が、遅かれ早かれ何らかの別の要素で補強されるようになることは自然の成り行きと言えるだろう。否定するという行為が、多くの場合積極的な心の働きを伴うものであることを考えれば一層それはもったもなことに思える。

二つの要素の併用が存在感の強い要素の方に統一されてゆくことも、言葉の経済という観点から納得しうる現象である。事実、フランス系ルイジアナクレオールでは「私は持っていない。」を [mo pa gɛ̃] (pa < pas) と言う。<sup>(4)</sup> 現代の口語が言語変化の行く末を予見させるものであるかどうかについてはもう少し慎重な議論が必要であろうが、言語の新しい傾向をしばしば先取りすることは確かであろう。

## II. 補助詞の諸相

本来の否定辞 ne に別の語(群)を組み合わせて否定を表現する様式は以外と古く、キケローなどの古典期のラテン語にも見られる。俗ラテン語ではこの種の否定表現がさらに多く見られ、その傾向がガロ・ロマン語に受け継がれることになる。

Plautus (前3～2世紀) : cui neque parata **gutta** certi consilii 「一滴も」

Cicero (前1世紀) : Ne **punctum** quidem temporis oppugnatio respiravit. 「一瞬なりとも」

Non licet **transversum digitum** discedere. 「指の幅ほども」

**Pedem** in Italia video nullum esse qui non in istius postestate sit. 「一尺も」

Petronius (後1世紀): *Quinque dies aquam in os suum non coniecit, non micam panis.* 「一かけらの…も」<sup>(5)</sup>

当初否定の強調要素として本来の意味を幾ばくか保持していたこれらの語(群)が、次第に表現力を失い、一種の形式的補助要素と随してゆく過程は、一種の文法化(grammaticalisation)と考えることができよう。

補助詞になりうるものは「大きな存在カテゴリー(時間、空間)や物質界の諸形態である」とヴァルトブルクは言う。<sup>(6)</sup> 否定と結びつきやすいのは小ささを連想させるもので、時間と空間に関しては普遍的な傾向が見られたとしても、具体的な名詞の場合は言語や文化によってかなり違う可能性がある。日本語の「爪の垢ほども…」に相当する表現が、他の言語でもそう多くあるとは思えない。

ラテン語	<b>mica</b>	<b>gutta</b>	<b>punctum</b>	<b>transversum digitum</b> 「指幅」
	「かけら」	「しずく」	「瞬間」	<b>passum pedis</b> 「歩幅」
	↓	↓	↓	↓
古仏語	<b>mie</b>	<b>goutte</b>	<b>point</b>	<b>pas</b>

最初から **pas** が代表的な補助詞であったわけではない。『ロラン』において **ne** と併用された **pas** が4例であるのに対して、**mie** は34例である。<sup>(7)</sup> 他の補助詞も現代語におけるより頻度は高かった。<sup>(8)</sup>

### III. 文法化の過程

ここでは最終的に勝利をつかむことになる **pas** を中心に考察するが、<sup>(9)</sup> 補助詞が文法化すると言うのは、この語が本来の語彙の意味とは無関係に純粹に否定を表現するようになることである。仮説的な言い方にならざるを得ないが、使用され始めたときは「一歩も」などの空間的否定であったはずである。実際、古仏語のテキストの中には明らかにそうである例が見られる。L. Fouletによれば、**pas** は否定の補助詞の中では最も古く成立過程の不明な語であるが、その始まりは次の例に見られるようなものだったに違いないと推測し

ている。<sup>(10)</sup>

Saches que ta fin est venue  
por ce que tu l'as retenue  
ne arestee un tot seul pas.

*Perceval*, 3799-801

それを更に裏付けるものとして彼は、同じ作品の中に、この語が直接目的補語を伴った否定文で用いられることが稀であることを挙げている。もし他動詞で直接目的補語を欠いている場合、*pas* が否定の補助詞であるかどうかを判断することは難しい。動詞が移動や往来を表すものであればなおさらである。またこの傾向は13世紀の作品に広く見られる現象であり、そこから彼はこの語が元々は自動詞の属詞か他動詞の目的補語であったと結論している。『ロラン』の数少ない例の中にも次のようなものがある。

Vos n'irez pas uan de mei si luign.  
Mais de s'espee ne volt mie guerpir.

*Roland*, 250.

” , 465

初期においては特に、*pas* が動作を表す動詞と共起するケースがかなり見られる。二番目の例でも、*mie* が *ne* の補助詞であると同時に、*guerpir* の目的補語として本来の意味を保っているようにも思える。(現代語訳：Mais de son épée il ne voulut lâcher [la miette ?] .) またその一方で同じ動詞が別の補助詞と一緒に使われている例もあるので、やはり補助詞の文法化は進行していたと考えられる。

Il ne vont mie a piet.

*Pèlerinage*, 286

結論としては、少なくとも13世紀までは本来の語義を多少とも残しつつ、既にかなり進行していた文法化が完成するまで更に数世紀を要したとすることができるであろう。

## VI. 補助詞の位置

通常の用法に限って言えば、否定に二つの言葉を同時に使用するのはロマンス諸語の中ではフランス語だけである。<sup>(11)</sup> 単一の要素だけが使われる場合は動詞前と動詞後に分けられる。大部分のロマンス語はラテン語の動詞前の位置を保持しているが、ロマンシュ語

とオック語だけは後に置かれる。しかしこの位置が比較的最近のものであることは、古風な用法において逆の位置をとっていることから伺われる。否定辞の位置はこれまで類型論的観点、つまり基本語順との関係において議論されることが多かった。ラテン語のSOVから大部分のロマンス諸語はSVOに移行している(M. Harris)。SVO型では副詞が動詞に前置するよりはむしろ後置することの方が自然だという前提に立てば、フランス語の最近の— ne が消えて pas の単独使用になりつつあるという一現象は類型論的に妥当な傾向と言えるのである。であるから、この現象がまさにSOVからSVOに移行する期間中に起こったということこそ重視されるべきである。ただ一般的に言えることは、否定辞(補助詞も含めて)は時代や状況によって位置を変えやすいということである。

	normale	renforcée emphatique	marginale archaïque spécialisée
latin	non V		ne V
français	ne V pas	ne V (pas du tout)	ne V ne V point
italien	non V	non V (mica+punto+niento)	V mica
espagnol	no V	no V nada	
catalan	no V	no V (pas+gens)	
portugais	não V	não V não	V não (Brésil)
roumain	nu V	nu V (de fel+de loc)	
rhéto-roman (ladin)	nu(n) V	nu(n) V brich	
rhéto-roman (romanche)	V buc(a)	V nuota	nun V na V
occitan	V pas	V pas (brica+gens)	noun V

( C. Muller : *La négation en français*, p. 211 より。一部筆者が修正。)

位置の問題は別として、否定に二語を用いるフランス語はこれまでしばしば言われてきたようにロマンス語の中では例外的存在なのだろうか。確かに *ne* だけで否定を表すケースはかなりあるが、これらは古風な用法に属するものであり、むしろ *pas* の単独用法の方が新しい傾向である。そうであるとすれば、フランス語の否定はオック語に接近しつつあると考えることも可能であろうか。*ne - pas* の二要素によって否定文を形成する方法がロマンス諸語の中では例外的であったとしても、ある統計によれば、世界の言語の 17% が実際にはこの方法に頼っていると言う。<sup>(12)</sup> 一般言語学的に言えば、分離二項式の否定表現は特殊なものではないし、ロマンス語の範囲に限っても過渡的には色々なところで出現してきたことは間違いない。

### おわりに

フランス語の否定の特殊性をあまり強調するのは正当と思われぬ。*pas* が元々持っていた語彙的意味を次第に失い、*ne* と共起する頻度が高まるにつれて確実に文法化は起こっていた。その始まりは不明であるが、文献の現れる時代には少なくともその兆しは既にあり、長い年月の間に少しずつ進行し、16世紀以降に幾分人為的な形で完成したとも言えるだろう。<sup>(13)</sup>

純粋な機能語 (*mots fonctionnels*) というものが存在するかどうかはともかく、文法化がかなりの程度完成するまでは時折本来の意味を垣間見せたりする。頻度は低いものの「水滴」を意味する *goute*<sup>(14)</sup> (<ラテン語 *gutta*) は早々に抽象化が進み、13世紀には《*ne ... goutte d'argent*》のような使われ方をしている。「水滴」—「金銭」のような異質でお互いに類推の効きにくい組み合わせの存在は、この語がその時点でいかに抽象化していたかを示している。現在では、否定辞としては *n'y voir goutte* 「全く見えない」などわずかな慣用句に残っているだけである。

先に述べたように *pas* は、中世においては *mie* に、近世においては *point* に優位に立たれながらも最終的には代表的な否定辞として勝ち残った。いくつかの有力なライバルをしのげて *pas* が生き残ったのは歴史的偶然なのか、それとも意味論的観点等から見て何らかの必然性があったのだろうか。いずれにしても、*pas* の定着とその後の単独使用への傾向はフランス語全体の変化の傾向とある種の調和を見せており、その意味ではこれからも継続される可能性が高いと言える。

## 註

- (1) Foulet は *auxiliaires de la négation* と呼んでいる。補助詞はその起源から①形容詞・代名詞 (*nul, aucun, plus*)②副詞 (*jamais, onc, guère*)③普通名詞 (*pas, point, goutte, rien, personne*) に大別できるが、その大部分は本来の意味を失った時点で副詞と見なしうる。Ashby は *the second negative* と呼んでいるが、この要素の余剰性を必要以上に感じさせるという意味でふさわしいとは思われない。
- (2) 1924, p. 479.
- (3) 初期のフランス語のテキストでは *nen* が母音の前に現れることもあった。
- (4) ポズナー p.314.
- (5) ヴァルトブルク、p. 50.
- (6) *Ibid.* p. 50.
- (7) Price, *Ibid.* また Foulet も、12～13世紀には *mie* が *pas* に劣らずよく用いられていたことを豊富な資料を基に述べている。(pp. 261-262)
- (8) 13世紀中葉の韻文作品『ヴェルジー城主の奥方』の中に *ne* が補助詞と共に使われている例が94あるが、そのうち *pas* が8、*mie* が7、*point* が6である。(Foulet, pp. 260-261.)
- (9) *point* は近代に至るまで長らく *pas* の競合相手であった。15世紀には、*de* と共に絶対的否定を表現する場合はほぼ *point* の一人舞台であり、この用法で *pas* が用いられるようになるのは16世紀になってからである。モンテーニュの《*Essais*》の最初の版では否定文は *ne* のみで *pas* (*point*) が付いていなかったが、7年後の新版では付け加えられた。16世紀の使用状況に関しては Gougenheim, p.240 以下を参照のこと。
- (10) Foulet, p. 259.
- (11) と言っても方言まで範囲に加えれば容易に断言はできないであろう。事実レト=ロマン語の一方言 *surmiran* を始めとするいくつかの方言では、動詞を二つの語で挟む否定が標準であると報告されている。Muller, p. 213.
- (12) Hagège. p. 86.
- (13) 現代フランス語の否定表現では、*ne* よりも *pas* の方が主役になりつつある。それは書き言葉では両者が併記されるが、話し言葉では *pas* が単独で用いられることが多くなってきているからである。(この点については Ashby を参照のこと。) 話し言葉では強調しやすい印象的な手段に訴える傾向があることを考えれば、*ne* に *pas* などの補助詞を加える傾向

は口語において常に先行して現れ、保守的な書き言葉が遅れてそれを採用するといった過程をたどってきたことは論を待たない。注(9)で述べたように、16世紀の口語で既に一般的であった補助詞の使用が文語でも一般化するためには、決断が必要だったのである。

(14) 現代語の綴りでは *goutte* であるが、中世においては *gote*, *goute* が普通。次行の例も同様。

### 参考文献

- Ashby, W. J. 1981 : "The loss of the negative particle *ne* in French : a syntactic change in progress", *Language* 57, pp. 109-137.
- Ernout, A. & Meillet, A. 1985 : *Dictionnaire étymologique de la langue latine : histoires des mots*. Klincksieck, Paris.
- Foulet, L. 1990 : *Petite syntaxe de l'ancien français* (3<sup>e</sup> éd.), H. Champion, Paris.
- Gaetone, D. 1971 : *Etude descriptive du système de la négation en français contemporain*, Droz, Genève.
- Gougenheim, G. 1951 : *Grammaire de la langue française du seizième siècle*, Picard, Paris.
- Hagège, C. 1982 : *La structure des langues*, P. U. F., Coll. « *Que sais-je?* », Paris.
- Harris, M. 1978 : *The evolution of French syntax : A comparative approach*. Longman, London.
- Horn, L. R. 1989 : *A Natural History of Negation*, The University of Chicago Press.
- Jespersen, O. 1917 : *Negation in English and Other Languages*, Lunos, Copenhagen.  
— 1924 : *The philosophy of grammar*, Allen & Unwin, London.
- Muller, C. 1991 : *La négation en français*, Droz, Genève.
- Posner, R. 1985 : *The Romance languages : a linguistic introduction*, Peter Smith. (ボズナー「ロマンス語入門」風間喜代三、長神悟共訳。大修館。1982.)  
— "Post-verbal negation in Non-Standard French : a historical and comparative view", *Romance Philology* 39, pp. 170-97.
- Price, G. 1962 : "The negative particles *pas*, *mie* and *point* in French", *Archivum Linguisticum* 14, pp.



1-34.

Rickard, P. 1989 : *A History of the French Language*, Unwin, London. (リカード「フランス語史を学ぶ人のために」伊藤忠夫、高橋秀雄共訳。世界思想社。1995.)

Wartburg, W. von 1965 : *Evolution et structure de la langue française*, Francke, Berne. (ヴァルトブルク「フランス語の進化と構造」田島宏、高塚洋太郎、小方厚彦、矢島猷三共訳。白水社。1976.)